【生活科】教科提案

自立をめざして

～主体的に活動・体験し，気付きの質を高める生活科～

１．研究テーマ設定の理由

（１）学校提案とかかわって

「自立の基礎を養う」という生活科の究極の目標に向かって，生活科部は「自立をめざして」をテーマに研究をすすめてきた。「学びをデザインする子どもたち」三年次にあたる本年度は，「主体的に活動・体験し，気付きの質を高めていく生活科」をテーマに，子どもの思いや願いに沿った活動・体験をすすめること，そこから生まれた気付きを意味づけたり，関連付けたりしながら，深化させていくことを研究の柱にした。

生活科は，子どもが身近な環境と直接かかわる活動や体験を楽しむことを大切にしている。低学年の発達段階には，文字言語や音声言語による認識よりも，活動・体験によって認識を深めるという特徴があげられるからである。よって，目で見たり，耳で聞いたりするにとどまらず，実際に触ったり，においをかいだり，味わったりと五感を研ぎ澄ませて対象に向き合うような活動を十分にさせたい。

同時に，表現活動にも重点をおく。なぜなら，子どもはいきいきと活動する中で，様々な気付きをしており，それらについて言葉や絵，動作，劇化などの多様な方法で表現することによって，生み出した気付きを自覚することにつながるからである。それら一つ一つの気付きから関連付けられた気付きへと，また自分自身への気付きへと質的に高めていくための支援について探っていきたい。

特に大切にしたいのは，子どもたちの「やってみたい！」「もっとやりたい！」を引き出す環境をどうつくっていくかということである。子ども一人一人を確かにみとりながら，単元の導入・単元の構成・一時間一時間の授業に工夫を凝らしていきたい。

（２）生活科でめざす子ども像

①自分と身近な人々や社会に関心をもって，主体的にかかわり，自分の住む地域のよさに気付き，愛着を持つとともに，その中で安全で適切な行動ができる子ども

②自分と身近な動物や植物などの自然に関心をもって，主体的にかかわり合い，自然のすばらしさに気付き，自然を大切にしたり，自分たちの遊びや生活を工夫したりできる子ども

③身近な人々，社会及び自然に関する活動の楽しさを味わい，気付いたことや楽しかったことなどについて，言葉，絵，動作，劇化などの方法により表現し，考えることができる子ども

④身近な人々，社会及び自然とのかかわりを深めることを通して，自分のよさや可能性に気付き，意欲と自信をもって生活する子ども

2．生活科学習における「学びをデザインする子どもたち」

（1）生活科におけるみとりと支援

生活科で学びをデザインする子どもの姿を次のようにとらえている。

①身近な人々，社会及び自然など対象とのかかわりから**具体的な気付きが生まれていく姿**
②身の回りにあるものを見直し，思いや願いをもって，**新たな活動を生み出していく姿**
③自分自身への気付きが生まれ，**自信や意欲が育っていく姿**

上記のような姿を実現するために，教師は一人一人の学びの様相をみとり，その子その子にあった支援を行っていく必要がある。

生活科での学びたいという欲求は，見てみたい・さわってみたい・作ってみたい・聞いてみたいという直接的な活動への意欲の高まりから始まる。そのために子どもの興味関心にあった教材を選択し，出合わせ方（導入）を工夫することや，子どもが意欲をもって活動する場・環境づくりに努めたい。

そして，一人一人の活動・体験をたっぷりととり，どの子も見たこと・感じたことを表現できるように様々な表現の仕方を用意したい。その様子をつぶさにみとっていく。その際，問い（なぜ？どうして？）がもてるように支援したい。そこから，みんなで探ってみたいことや向かっていく方向性を見出していく。

そして，学級における友達との伝え合いや交流を繰り返しながら，個々の思いや願いを明らかにしたり，高めたりしていく。単元によっては，明らかになったり高まったりしたことを他学級や家族などに伝えたり，発表したりする場を設け，身近な人々とかかわることの楽しさを実感できるようにしたい。また，学習活動を通して生まれた新たな課題意識を表現する場として，朝の会や帰りの会，学級便りなども活用していく。

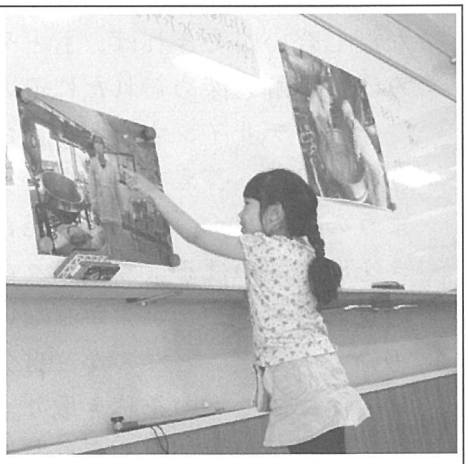
さてこのように，個々の思いや願いが高まっていくためには，聴き合う関係づくりが欠かせない。それは生活科のみならず，他教科や日々の生活で常に意識しながら育てていきたい。

（2）実践例

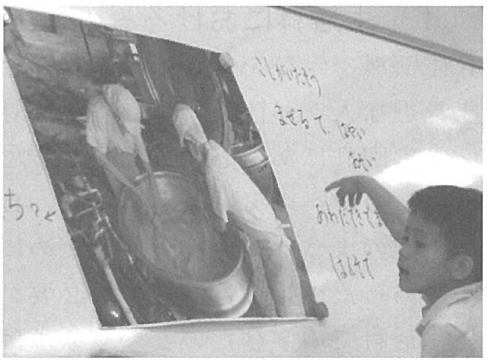
1年生「だいすき　ぼくらのふぞくしょうがっこう」

学校たんけんや食育の授業から，「給食室の中を見てみたい。」「どうやって作ってるのかな？」というハテナを多くの子どもがもった。そこで，作っているところをビデオ収録し，子どもたちに見せた。気付いたことを話し合う場面である。

こゆき：なんでね，こんな服で行かなあかんの？（ビデオ収録時に着た上下白の服装を指して）
ほなみ：あのね，なんでね，あの服で行くかはね，服が汚れたらあかんからと思います。・・・①
しゅん：けどさ，白でもね，服汚れるで。だってね，絵の具のときでもね，何も書いてない白の服にね，ついたよ。・・・②
ほなみ：けどね，白はね，汚れてもいい服なんやで。
ひろし：そうそう。白のズボンはいてなかったらさ，落ちたときにかかるやん。



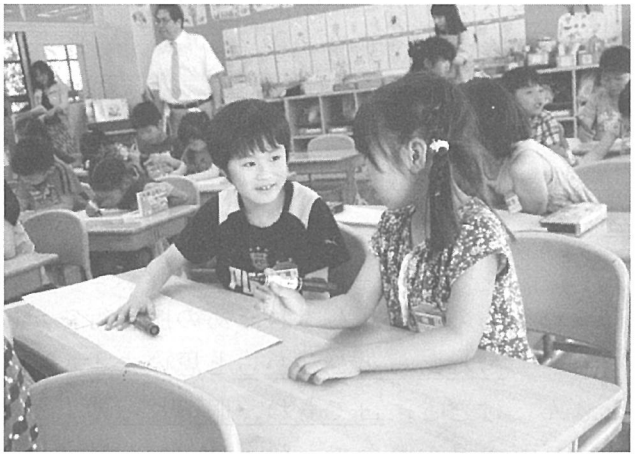
はるな：作っている人は半袖やのに，先生は長袖。なぜかな？
ひさき:あのさ,(作ってる人の服が)つながってる。
教　師：白の服？ピンクの方？
ひさき：ピンクの方。
かいと：エプロンのことかな。
もとや：なんでマスクをしてるの？・・・③
なおみ：なんでこんな服なん？・・・④
りょう：たまごとかまぜてたらね。袖につくから。
あやか：汚れたらあかんから。
教　師：白はね，汚れが目立ちやすいんです。・・・⑤
たくや：なんでさ，（白い）服の上にエプロンしてるの？



こゆきが白い服で給食室に入らなければならないのはなぜかというハテナを出した時，学びをデザインするチャンスであった。ところが，教師の支援が不十分だったために，子どもの思考が焦点化されずにぐるぐると回り続けていることが分かる。

こゆきのハテナに対して「白い服の下に着ている服を汚さないため」という考えを述べたほなみ①。それを「白の服は汚れにくい」というふうに取り違えたしゅん②は，白い服が汚れた経験を語った。でも「白の服は汚れてもいいもの」だと説明するほなみ。教師は，それでもしばらく子どもの話を聞いていたが，ここは，早いうちに話がかみ合っていないことに対して，整理してやる必要があった。

たとえば「一番，汚れたらいけないものって何かな？」と問いかけることで，自分たちで考えをつなぎながら，大勢が口にする給食にほこりや汗やつばが入ったら困ることに気付くことができただろう。①のほなみのように「自分の服」という意見が続く場合は，「自分の服が汚れないために着るのなら，白以外の服でもいいのに，なぜ白を着るのかな？給食当番の服も白よね。」と補足して投げかけることで，汚れが目立ちやすい白を着て，清潔に保っていることに気付くことができただろう。同じく白色の着衣であるマスクや帽子は，自分の汚れを調理場に持ちこまないために必須であることに気付きを広げていけたのではと考える。そのような話し合いができれば，もとや③やなおみ④も理解を深められたに違いない。



学びをデザインする姿をめざすには，⑤のように，答えをこちらから言ってしまうのではなく，子どもの発言から気付きを深めていけるよう，様々な手立てを用意しておくことが欠かせない。何を見てそのように考えたのか，どの子の発言からひらめいて考えたことなのか，自分のどんな体験と絡めて話そうとしているのか，子どもの発言の奥にあるものを聴き取り，適切な問いかけや問い直しをしてやることがその１時間の子どもたちの学びを大きく左右する。

３．研究の展望

研究は２つのことから進めていきたい。

１つ目は，子どもたちを深くみとり，学習活動をすすめていくことである。みとる方法は授業中の発言・行動記録・ワークシート・具体的な表出物などがあげられる。あわせて，休み時間の子どもたちの気付きや朝の会・帰りの会での発言などもていねいにみとり，必要なことを記録しておく。これによって，教師のみとりが深まるだけでなく，子どもたちに，自分はどのように変容したかを実感させる手がかりにもなる。

そして，このみとりをもとに，子どもたちの思いや願いに沿った学習課題を設定したい。もちろん課題は，学習指導要領の内容や教材の持つ価値を含んでいることが前提である。また，課題設定までの体験や課題解決のための学習活動を繰り返し行うことも必要である。これは，一人一人が“もの・こと・ひと”に繰り返しかかわることで，新たな気付きが生まれ，気付きが深まることで，必然性や連続性をもった活動が可能になるからである。

２つ目は，各教科・領域と関連付けた年間学習指導計画をたてることである。低学年の子どもたちは学校生活で起こるすべての学習経験・体験が学びにつながる可能性がある。生活科だけで“学びをデザインする子どもたち”をめざすのではなく，すべての教科・領域とかかわり合いながら，進めていけるようにしたい。このことが気付きを深める手立てのひとつになると考える。

４．研究の評価

子どもたちが主体的に学習活動に取り組めているかを知るために，教師は様々な表現方法を子どもたちに提示した。子どものかいた文・絵，つくったものから思いを知ることで，見通しをもっているかを探った。また，連続性のある掲示を行い，子どもの思いや願いを可視化したり，活動の様子を写真やビデオにとったりして，個の変容・課題意識の深化をみた。

行動観察は重要であるため，必要に応じて記録していった。そして，学校生活だけのみとりではなく，家庭生活の様子，保護者の思いなど子どもたちの今までの生活経験なども考慮して支援の手だてとしてきた。また，生活科で得た学び方が，他教科・領域であらわれているかをノートやワークシート，日記など様々な表出物で見てきた。

〈引用・参考文献〉
文部科学省（2008）「小学校学習指導要領解説生活編」
和歌山大学教育学部附属小学校（2014）　領域提案　生活科
田村学(2009)「今日的学力をつくる新しい生活科授業づくり」
秋田喜代美・編「教師の言葉とコミュニケーション～教師の言葉から授業の質を高めるために～」教育開発研究所